

# 韓国の EPS-TOPIK についての総合的考察

— 日本の大学生を対象とした模擬受験結果との比較をふまえて —

吹原 豊・松崎 真日・助川 泰彦

## Abstract

Korean Foundation of Education has developed an official language proficiency test for migrant workers which is presently called EPS-TOPIK (Employment Permit System - Test of Proficiency in Korean). In this research, disputes such as appropriateness of test difficulty, word choice, etc. are considered through analyzing the result of a mock test conducted for Japanese learners of Korean.

It was suggested that questions about general situations are rather easy, however, questions concerning working situations are quite technical and difficult and that listening comprehension seemed easier than reading comprehension probably because of the slow speed of recording. Lastly, it was suggested that test words must be selected paying attention to learner's basic needs in their life in Korea for their welfare.

**Key words:** EPS-TOPIK, mock test, characteristics of the test, difficulty, appropriateness, learner's welfare

## 1. はじめに

韓国では2004年に外国人勤労者雇用許可制度 (Employment Permit System。通称、雇用許可制。以下、EPS と称する) が施行されて以来、非専門職人材の外国人労働者の雇用を許可し、人材不足に悩む労働現場に配属するといった取り組みを続けている。EPS では、韓国への移住労働に際して、一定の韓国語能力を所持していることが求められ、また、それを証明するために雇用許可制韓国語能力試験 (以下、EPS-TOPIK) と呼ばれる試験で一定の点数をおさめることが要求される。

本稿では、EPS-TOPIK の設問の妥当性と難易度について検討したい。そして、そのために日本の大学生を対象に行った EPS-TOPIK の模擬受験結果を手がかりにして分析を進めることにする。

なお、筆者らは、吹原・松崎・助川 (2016) において EPS-TOPIK についてその概要と特徴を述べ、その後、移住労働者が韓国で実際に仕事を始める前の韓国語学習について考察を試みている。本稿では、そこで記述した内容をふまえて、韓国の EPS-TOPIK の試験問題の特徴、難易度、妥当性を検討するものである。前著もあわせてご一読いただければ幸いである。

## 2. 本研究の目的

本研究の目的は、EPS-TOPIK について総合的な考察を行うことである。具体的には、EPS-TOPIK の実態把握に取り組んだ先行研究の議論を整理することにする。その上で、日本の大学で韓国語を学ぶ大学生に模擬受験を実施した結果を通じて、試験問題の特徴、難易度、妥当性を検討することにする。そのことによって、公開情報が極めて少ない EPS-TOPIK の実情を理解し、ひいては移住労働者対象の言語教育政策への示唆を導き出すことも試みたい。

## 3. 先行研究

韓国の雇用許可制（以下、EPS）に関しては、情報公開が極めて制限的に行われているが、EPS-TOPIK に関する情報公開も同様である。単なる語学能力試験ではなく、外国人労働者の雇用という点で語学教育の世界にとどまらずさまざまな方面に影響を与える制度であるため、情報公開に慎重であるものと考えられる。公開された情報が少ないということは、研究の手がかりになる資料が少ないということでもあり、その意味で EPS-TOPIK の研究には困難がつきまとう。しかし、そのような中でも研究者によって EPS-TOPIK に対する検討が続けられてきている。

EPS-TOPIK は2004年に EPS の開始とともに始まった。当初は EPS-KLT (Korean Language Test) という名称であり、2009年に現在の EPS-TOPIK に名称が変更されている。時系列で見ていくと、召兪正（2008）は EPS-KLT を分析した研究である。ここで注目されるのは合格率の変動である。たとえば、スリランカで行われた第3回試験（2006.06.11）では80.0%、フィリピン第5回（2007.05.06）では82.2%、タイ第4回（2007.11.04）では81.8%の高い合格率を記録する一方、スリランカ第5回（2007.10.28）では28.4%、フィリピン第4回（2006.10.29）では51.29%、タイ第2回（2006.11.26）では45.6%と、合格率が50%にも満たない場合も見られることを指摘している。短期間での合格率のこれほどまでの変動は一般には考えにくいことであり、この点に関して召兪正も疑問を隠していない。そして、可能性として、試験が不定期に実施されることから受験者の準備不足、難易度設定の問題等があったのではないかと推測している。

同様に、김명광（2011）においても合格者数の変動について疑問が示されている。この研究では著者が確認した統計資料<sup>1</sup>をもとに分析をしている。その中でインドネシア第5回（2009.05.09-10）の合格率は16.1%であったが、インドネシア第6回（2010.09.05）では80.6%を記録しており、この合格率の差は人為的な操作によるものであると指摘している。

정호진（2013b）は EPS 締結国に設置されている韓国政府系の韓国語教育機関である世宗学

---

1 「韓国人力公団資料」、「韓国語世界化財団統計資料」とのみ紹介されており、詳細は不明である。なお、韓国語世界化財団は2001年に設立され、2012年に解散した政府系の財団であり、現在の世宗学堂財団の母体となった。EPS-TOPIK の前身にあたる EPS-KLT の試験実施にも関わっていた。著者はかつて韓国語世界化財団の責任研究員であった経歴を持つ。

堂の韓国語教員と、EPS-TOPIK に合格して渡韓し、韓国で働いている労働者を対象に2012年10月にアンケート調査を行っている。調査の結果で特に興味深いのは外国人労働者に対するアンケート調査の結果である。このアンケート調査は、韓国の大邱市に居住する外国人労働者を対象に行ったもので、対象者の国籍は多様である。ここでは、このアンケート調査の結果のうち、本研究に関連すると思われる3つの質問とその回答を紹介したい。1点目はEPS-TOPIKの受験回数についての質問である。この質問に対し全体の77%が1回と回答した。つまり、初めての受験で合格した者が圧倒的に多いことが分かる。なお、2回が22%、3回が1%であり、4回以上受験した者はいなかった。この結果からは、韓国で働いている労働者の多くは1度の受験で合格した者が多いことが推察される。

2点目はEPS-TOPIKの受験準備の方法についてである。この質問に対しては、民間語学学校等の利用という回答が最も多く49%を占めた。次いで、独学が25%であり、全体の4分の3ほどはこれらの方法で準備をしたことが分かる。その他、世宗学堂が13%、教会等の宗教施設9%、家族または友人が4%、その他が1%であった。教室に通わないで独学した者が25%であったことは、問題プール<sup>2</sup>からの出題比率が高いという出題方式とも関わっているものと思われる。

3点目はEPS-TOPIKの準備期間に関する設問である。この質問に対しては、準備期間は1ヶ月という答えが最も多く40%、次いで1～3ヶ月が36%であり、これらで4分の3を占めた。さらに4～6ヶ月が10%、7～9ヶ月が7%、10ヶ月以上は7%という結果であった。準備期間は短期間である場合が多いと言えよう。정호진 (2013b) は雇用許可制に関する公開された情報が極めて少ない中で、外国人移住労働者の最初の関門であるEPS-TOPIKの実態をアンケートという方法で明らかにしようとした論文として評価できる。

吹原・松崎・助川 (2016) は外国人移住労働者が就業以前において外国語をどのように、そしてどの程度習得しているかについて、EPS-TOPIKの試験制度の背景を述べた上で、試験方式と難易度から考察したものである。この研究では、EPSが成立した2004年以後、語学試験も実施されるようになったが、制度の改変も相次いでいることを示した。またEPS-TOPIKによる選抜は、EPSにおける韓国語能力評価のすべてであることから、EPS-TOPIKの重要性が明らかであることを指摘し、研究の必要性を述べた。試験の難易度に関しては、四者択一という出題形式とあわせ、難易度が極端に低い問題が含まれていること、合格ラインの設定が低いことなどを指摘した。外国人移住労働者にとって現地語の習得は長期にわたる移住労働生活をより幸福にするために重要であると思われるが、現実には労働者確保が第一義とされる問題や教育インフラの整備などとも関わり課題が多く存在することが分かった。

最近の研究では이미혜 (2016) が注目される。この研究では、韓国産業人力公団の資料『외

2 韓国では「問題バンク (문제은행)」という言い方をしているが、本稿では日本で一般的な用語である「問題プール」を使用する。EPS-TOPIKでは2013年までは、すべての問題が公開されている問題プールから出題されていた。2013年以降は、問題プールからの出題比率を徐々に下げていくことが告知されているが、その後も問題プールは受験者への「参考」として公開されている。

국인 고용허가제 Data Book』<sup>3</sup>から EPS-TOPIK の合格者数データ（2007年から2015年まで）を示している。ここで示された受験者数と合格者数、合格率は以下である。

表1 『외국인 고용허가제 Data Book (外国人雇用許可制データブック)』の EPS-TOPIK の受験状況

年度	一般韓国語能力試験			特別韓国語能力試験 <sup>4</sup>			
	受験者	合格者	合格率	受験者	合格者	合格率	備考
2007	15,303	9,490	62.0%				
2008	189,774	77,704	40.9%				
2009	48,902	8,850	18.1%				
2010	221,895	75,437	34.0%				
2011	300,739	99,924	33.2%	475	315	66.3%	2カ国
2012	166,082	64,055	38.6%	10,484	8,338	79.5%	9カ国
2013	221,871	72,189	32.5%	20,565	14,133	68.7%	12カ国
2014	235,585	42,874	18.2%	21,191	8,881	41.9%	14カ国
2015	135,981	34,402	25.3%	7,023	1,561	58.8%	

(이미혜 2016をもとに筆者作成)

合格率に注目すると2009年と2014年は18%台であったのに対し、2007年では62%を記録しており、年度ごとの合格率に大きな差があることが分かる。この差について、이미혜（2016：468-469）では、合格者数は外国人労働者の需要により決定されたものであり、難易度や受験者の能力の違いによるものではないとしている。ただ他方で、EPS-TOPIK の結果をもとに作成される「外国人求職者名簿」は実際に韓国で受け入れる人員の3倍規模相当で構成することを前掲の資料から述べており、論述内容に矛盾もみられる。이미혜（2016）も指摘しているが、10万人以上が受験する試験において、このように合格率が上下することは一般的には考えにくい<sup>5</sup>。下の表は、一般韓国語能力試験合格者数および特別韓国語能力試験の合格者数と雇用許可制外国人労働者年度別割当人数<sup>6</sup>を示したものである。

各年度の二種類の韓国語能力試験の合格者数と割当人数の間には、全体的な傾向としては、比例関係を読み取ることも可能であると思われる。ただその比率は上下しており、リーマン

3 筆者らは、本資料は未見である。韓国の代表的な図書館である国立国会図書館、国立中央図書館、また本資料の発行元になっている韓国産業人力公団の電子図書館等では所蔵が確認できない。このことから公刊を前提としない内部資料と推察される。ここでは이미혜（2016）の記述から再引用する形で紹介したい。

4 特別韓国語能力試験とは、3年以上韓国内の事業所で労働した後に、自発的に帰国した者が再度雇用許可制を利用して韓国で働くとする場合に受験する韓国語試験であり、一般の韓国語能力試験とは別枠で管理されている。なお、一つの事業所で満期まで働いたのちに一旦帰国し、3ヶ月以上の期間待機した後、再度韓国の同じ事業所で働くことができる誠実勤労者再入国制度とは別の制度である。最近ではこの誠実勤労者制度での再入国者が増加しているため、2017年は特別韓国語能力試験の実施を一時的に取りやめている。

5 EPS-TOPIK は過去の既出問題も非公開となっており、毎回の試験問題の難易度について議論することは難しい状況にある中で、根拠は不明であるが、合格率の違いについて明快に記述していることを鑑みると、論文では明らかにされていない情報を入手している可能性も考えられる。

6 雇用許可制ホームページ（<https://www.eps.go.kr/> 2017年9月21日閲覧）で公表されているデータを使用した。

表2 EPS-TOPIK の合格者数と年度別割当人数

年度	一般韓国語能力試験 合格者数	特別韓国語能力試験 合格者数	合計	年度別割当人数
2007	9,490		9,490	49,600
2008	77,704		77,704	72,000
2009	8,850		8,850	17,000
2010	75,437		75,437	34,000
2011	99,924	315	100,239	48,000
2012	64,055	8,338	72,393	46,000
2013	72,189	14,133	86,322	52,000
2014	42,874	8,881	51,755	47,400
2015	34,402	1,561	35,963	45,000 <sup>7</sup>

ショックの需給調整が終わったと思われる2010年以降でも2010年、2011年の合格者数は割当人数の2倍を超えているのに対し、2012年以降倍率が低下傾向を見せ、2015年度には合格者数が割当人数より少なくなっている。以上のデータからは、合格者数の決定に年度別の割当人数が考慮されていると見ることも可能であるが、それだけでは十分には説明できないため、別の要因もあるように思われる。

以上の先行研究からも明らかなように、EPS-TOPIK については公開されている情報が極めて限定されているため、その実態については不明な点が多い。韓国に入国している労働者へのアンケート調査からは、準備期間が1～3ヶ月程度の者が多いこと、また合格率は人為的操作が働いた結果であるという指摘もあるとはいえ、近年では40%に満たないことなどが分かっている。

しかしながら、以上に挙げた情報のみでEPS-TOPIK の難易度および妥当性について議論することには限界がある。なぜならば、韓国に入国している労働者は相対的に高得点を記録した者であるため、アンケート調査の結果は高得点者を対象にしたものであると見ることができるからである。また、そもそもEPS-TOPIK の合格率の数字には信頼性が不足しているためでもある。

以上のことをふまえ、本稿では日本国内のF大学の共通教育科目として韓国語を学ぶ大学生を対象にEPS-TOPIK の模擬受験を実施し、その結果からEPS-TOPIK の難易度と妥当性について議論することにした。

#### 4. 模擬受験の概要

模擬受験の概要は以下のようである。まず模擬受験を行ったクラスは、F大学の第二外国語科目として開講されている初級クラスである。ゼロスタートを前提としたクラスであり、韓国語を専攻とする学生が含まれない一般的な第二外国語のクラスである。なお、韓国語を母語と

7 吹原・松崎・助川 (2016: 138) では2015年度にEPSで入国する労働者を43,100人としたが、これは論文執筆時のデータであり、年度末までに1900人の追加割当があった。雇用許可制ホームページでも「45,000 [43,000 + α(1900)]」と記述されている。

する受講生はいなかった<sup>8</sup>。このクラスでは90分授業が週2コマずつ15週間行われるが、このうち14週目（聴解試験）と15週目（読解試験）のそれぞれ1コマの一部の時間を使用し模擬受験を実施した。14週目の聴解試験受験時の総授業時間は39時間、15週目の読解試験受験時は42時間となる。

同クラスの受講者数は54人であったが、2科目とも受験した学生のデータから総学習時間に違いのある2人のデータを除いた49人分のデータを分析対象とした。また、対象となったクラスでは、大学の共通教科書に沿って授業が進められており、事前に試験内容の詳しい紹介や、試験対策等は行わなかった。ただし、出題形式に関する知識がないため、問題文のみ教員が口頭で和訳を伝えた。なお、選択肢や図・写真についての和訳は行っていない。

表3 模擬受験結果の分析対象者

属性	第二外国語初級クラス受講者
分析対象者	49人
受験時の授業時間	40時間前後（聴解試験受験時：39時間、読解試験受験時：42時間）
事前受験対策	なし
その他	紙面に書かれた問題文のみ教員が口頭で日本語訳を伝えた

#### 4-1. 試験問題の選定

試験問題の作成は、問題プールから抽出する方法で行った。問題プールは聴解、読解ともに960題ずつ収録されており、先述した通り、それぞれ4つのカテゴリで構成されている。したがって、出題はこの4つのカテゴリからなされることが望ましい。また、問題プールの問題数は4項目が均等に収録されているわけではなく、偏りが見られる。たとえば、聴解問題において「視覚資料」は33.3%を占めているが、「音と表記」はその約半分の16.7%に過ぎない。問題プールの収録問題数の違いは、実際の問題における比率と関係があると考えられることから、この問題数に沿った形で模擬試験の問題を構成することが妥当であると考えられる。さらに、問題プールの問題を分析すると、それぞれのカテゴリには問題形式ごとに問題群としてまとまって複数の問題が収録されていることが分かる。たとえば、絵や写真を見て、それに合うものを選ぶタイプの問題群や、逆に文を読んでその内容に合う絵や写真を選ぶタイプの問題、問題文の空欄を補充する問題などである。したがって、仮に各カテゴリの最初の方や後ろの方に収録された問題のみで問題を構成した場合、ある特定の問題形式に偏重した出題になってしまう。問題プールに複数の問題形式が示されていることを考慮すると、模擬受験においても複数の問題形式による出題が望ましいと言える。

以上のような問題プールの特徴をふまえ、問題プールからの試験問題の抽出は一定の間隔で

8 中国語を母語とする正規留学生（交換留学生でない）が1人含まれているが、韓国語はゼロスタートであった。

機械的に行うこととした。実際の試験では、聴解試験、読解試験ともに問題数が25問であることから、問題番号20番から40問ごとに機械的に抽出することとした。以下は、カテゴリごとに出題された問題プールの問題番号を分類したものである。40問ごとに1題を抽出しているため、各カテゴリが問題プールに占める割合に沿った問題数が抽出されるとともに、出題形式の面でも特定のタイプへの偏りを避けて出題することが可能になったと言えよう。

表4 聴解模擬試験問題の構成

カテゴリ	問題プール番号	模擬試験における比率	問題プールの比率
音と表記	20, 60, 100, 140	16%	16.7%
視覚資料	180, 220, 260, 300, 340, 380, 420, 460	32%	33.3%
対話	500, 540, 580, 620, 660	20%	20.8%
対話や話	700, 740, 780, 820, 860, 900, 940-1, 940-2	32%	29.2%

表5 読解模擬試験問題の構成

カテゴリ	問題プール番号	模擬試験における比率	問題プールの比率
事物と状況の説明	20, 60, 100, 140, 180	20%	20.8%
語彙と語法	220, 260, 300, 340, 380, 420, 460	28%	29.2%
実用資料の情報	500, 540, 580, 620, 660, 700, 740, 780	32%	33.3%
読解	820, 860, 900, 940-1, 940-2	20%	16.7%

## 4-2. 模擬受験の結果

### 4-2-1. 聴解模擬試験

聴解模擬試験の結果であるが、平均点は100点満点で52.5点であった。正答率にすると、52.5%ということになる。EPS-TOPIKは聴解と読解を合わせた正答率40%以上が合格の基準になるが、聴解ではこの基準を上回る結果であったと言える。

問題別の正答率を見ると、100%を記録した問題がある一方、最も低いものでは10.2%であった。ここでは正答率が高かった問題と逆に低かった問題の分析から、聴解試験の難易度と妥当性を考えることとする。

次の表は聴解模擬試験の問題別正答率を示したものである。

この表を見ると、高い正答率を記録した問題の多くが「音と表記」に集中したことが分かる。得点率が90%以上であった問題は1, 2, 3, 4, 7番であるが、このうち1~4は「音と表記」の問題である。反対に正答率が25%に達しなかった問題、つまり四者択一であることから確率論的には25%の正答率が予想される中で、それに達しなかった問題は6, 13, 15, 16, 17番であった。6番を除き、「対話」の問題であったことがわかる。問題項目の違いが正答率に強く影響していると言える。

まず、正答率の高かった問題から検討することとする。ここでは「音と表記」から代表して4番を、また視覚資料の問題で95.9%の正答率が記録された7番の問題を取り上げることとする。次は4番の問題である。

表6 聴解模擬試験の問題別正答率

カテゴリー <sup>9</sup>	問題番号	問題プールの番号	正答率
音と表記 (96.9%)	1	20	100%
	2	60	95.9%
	3	100	91.8%
	4	140	100%
視覚資料 (46.4%)	5	180	36.7%
	6	220	16.3%
	7	260	95.9%
	8	300	55.1%
	9	340	49.0%
	10	380	32.7%
	11	420	42.9%
	12	460	42.9%
対話 (21.2%)	13	500	24.5%
	14	540	32.7%
	15	580	16.3%
	16	620	22.4%
	17	660	10.2%
対話や話 (55.9%)	18	700	89.8%
	19	740	53.1%
	20	780	71.4%
	21	820	44.9%
	22	860	53.1%
	23	900	28.6%
	24	940-1	65.3%
	25	940-2	40.8%
聴解模擬試験全体	全25問		52.5%

聴解4. 들은 것을 고르십시오. (聞いたものを選びなさい。)<sup>10</sup>

- ① 나중에 다시 올게요.
- ② 반장님이 찾으셨는데요.
- ③ 저기 앉아 있는 사람이예요.
- ④ 오늘은 반장님도 일찍 가실 거예요.

この問題は音声聞いて①～④のどの文を読み上げたものかを選ぶ問題である。①～④の文は、音声的には違いが大きいと思われる。たとえば、最初の一音節も全て異なっており、ハンゲルを音と結びつける能力さえあれば容易に正解できる問題であると言える。他の「音と表記」の問題は、語彙レベル、文レベルの違いはあれ、いずれも文字と音を結びつける問題であったため、受験者の多くが正解できたものと考えられる。

次に、「視覚資料」の問題として出題した7番の問題を見てみよう。この問題の正答率は95.9%であり、49人中47人が正答を選んだ問題である。

9 カッコ内はカテゴリーごとの正答率である。たとえば「音と表記」で出題された4題の平均得点率は96.9%であった。

10 韓国語の問題文に続けてカッコで日本語の意味を示した。模擬試験においてはこの日本語の部分は印刷せず、韓国語の問題文のみを与え、日本語部分は教員が口頭で伝達した。他の問題でも同様である。



聴解 7. 여기는 어디입니까? (ここはどこですか。)

- ①
- ②
- ③
- ④



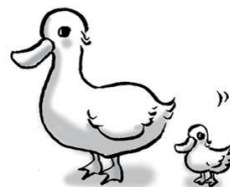
7番は、写真の説明として合う音声を選ぶ問題である。①～④として流される音声は次のものである。①공항입니다. (空港です。)<sup>11</sup>②기차역입니다. (汽車の駅です。)③지하철역입니다. (地下鉄の駅です。)④버스 정류장입니다. (バスの停留所です)。問題の写真はバスが停留所に停車しているものである。選択肢から判断するに、バスという乗り物の種類を問うのではなく、この場所がバス停であることを認識しているかを問う問題と言えるだろう。さて、①～④の選択肢であるが、④で버스 (バス) というキーワードが出現する。①～③までにはこの語彙は使用されていない上、写真がバスを中心としたものであるため、受験者は④で出現した버스 (バス) という単語を手がかりに、答えを選択し正答したものと思われる。버스 (バス) という語彙は交通機関を表す基本語彙であるため、既習語彙であったこと、また日韓両言語ともに、英語 Bus に由来する外来語が使用されているため、容易に正解できたものと思われる。

次に、正答率が低かった問題を取り上げてみたい。はじめに、先の問題7と同じ「視覚資料」のカテゴリの問題番号6番を取り上げ、次いで、正答率が全体的に低かった「対話」から特に正答率が低かった17番を取り上げることとする。

6番の問題は次のようであった。

聴解 6. 이것은 무엇입니까? (これは何ですか。)

- ①
- ②
- ③
- ④



この問題で提示された絵はアヒルである。受験者が聞き取る音声は次のようなものであった。①개입니다. (犬です。) ②소입니다. (牛です。) ③토끼입니다. (ウサギです。) ④오리입니다. (アヒルです)。受験時点で犬やウサギといった語彙は発音練習の中で提示されてはいたが、意味ある文脈の中での学習はなされていない状況であった。そのため、受験者の記憶にはほとんど残っていなかったものと思われる。正解するために必要な語彙であるアヒルについては、

11 括弧内に記した日本語は本稿での説明上付記したものであり、実際の模擬試験ではいかなる形でも提示していない。受験者は韓国語の音声のみを聞き、解答した。

授業で取り上げたことはなかったため、ほぼ全員が未知であったと思われる。

「対話」のカテゴリーで正答率が高かった7番と、反対に低かった6番のいずれもが、手がかりとなる語彙知識の有無により、成否が分れたと言える。そのことからすると、これらの問題はリスニング能力を測る問題というよりは、語彙力を測る問題であったとも言えるであろう。ただし、語彙能力を測る問題であったとしても、果たして오리 (アヒル) という語彙知識を問うことが外国人労働者の「韓国語駆使能力」<sup>12</sup>の測定として妥当であるのかについては、検討の余地がある。

次に、問題番号17番を見てみたい。

聴解17. 질문을 듣고 알맞은 대답을 고르십시오. (質問を聞き適切な応答を選びなさい。)

【リスニングスクリプト】

한국말로 이야기할 수 있어요? (韓国語で話ができますか?)

- ① 네, 한국말이 어려워요. (はい。韓国語が難しいです。)
- ② 네, 작년 겨울에 왔어요. (はい。昨年冬に来ました。)
- ③ 네, 한국에 일하러 왔어요. (はい。韓国に働きに来ました。)
- ④ 네, 쉬운 말은 할 수 있어요. (はい。簡単なことばはできます。)

17番の問題は、音声で流される質問を聞き、その質問に対する答えとして適切なものを選択肢から選ぶ問題である。正答は④であるが、正答率は低く、10.2%であった。正答率が低かった理由は、質問文に未習の文法 (－ㄴ 수 있어요? ～できますか) が使用されており、質問の意味が把握できなかったことが挙げられる。可能の意味を表す「－ㄴ 수 있어요? ～できますか」は初級レベルの文法事項として重要であるだけでなく、質問も韓国語スピーキング能力の有無を尋ねるものであり、EPSの韓国語試験として妥当なものと言えるであろう。この問題に限らず「対話」のカテゴリーの問題は全体に正答率が低かったが、その理由としてはいずれも未習項目を聞き取らなければならなかったことが挙げられる。同様に、問題番号13の「한국에 처음 오셨어요? (韓国に初めていらっしゃいましたか。)」の音声には尊敬形と過去形が、問題番号14の「한국말을 배운 후에 무엇을 할 거예요? (韓国語を学んだ後に何をしますか。)」という音声には連体形と未来形が、問題番号15の「지금 계시는 곳의 위치를 말씀해 주세요. (今いらっしゃる所の位置をお話してください。)」という音声では尊敬形と連体形に動詞の活用が、それぞれ組み合わせられた形で入っている。また、問題番号16の「이 수박은 한 통에 얼마예요? (このスイカは一玉につきいくらですか。)」では「スイカ」、「玉」といった単語が未習であったことが誤答に繋がった可能性が高い。

12 ここで「韓国語駆使能力」と鍵括弧を付きで表記したのは、EPS-TOPIKが公式に謳っている試験の目的を「韓国語駆使能力」および「韓国社会に対する理解の程度」を図ることとしていることを示すためである。駆使(구사)という語彙は、国語辞典的に言えば「ことばや修辭法、技巧、手段等を上手に自由に使うこと(말이나 수사법, 기교, 수단 따위를 능숙하게 마음대로 부려 쓰다)(韓国・国立国語院『標準国語大辞典』)」という意味である。試験の理念はそれとして、本稿では現実に運用されているEPS-TOPIKが、このような意味での能力を測定しているかを議論していることを明確にしておきたい。

「対話」のカテゴリーにおいて聞き取らねばならない韓国語は、いずれも韓国生活で使用する、または聞き取ることが想定されている基本的な表現と言えるであろう。これらの韓国語を聞き取れない状態で、韓国に入国し労働現場に入ることは、その後の生活での困難を十分に予想させるものと言える。その意味で、ここに挙げた「対話」の問題は韓国語駆使能力の測定という目的に合致したものであると言える。

しかし、他方で、聴解試験全体を俯瞰すると、「音と表記」カテゴリーの問題の難易度が極めて低いことが問題点として指摘できる。回答方式が四者択一であることから、確率的には25%の正答率が確保されているとみなすことができ、その意味で「音と表記」の全4問に正解すれば、他の問題は25%の確率で正答しても、最終的な正答率は40%に達することになる。聴解試験が全体として「韓国語駆使能力」の測定に妥当な試験となっているかという点についていえば、設定されている合格基準が低いことから、選抜基準としての試験の妥当性が損なわれていると指摘せざるを得ない。

本聴解模擬試験は、50人以上のクラスで39時間の授業を受けた大学生を対象に実施したが、52.5%の正答率を記録した。下の表は、聴解模擬試験の正答率別の人数を示したものであり、目安となる40%に達しなかった受験者は3人にすぎないことが分かる。

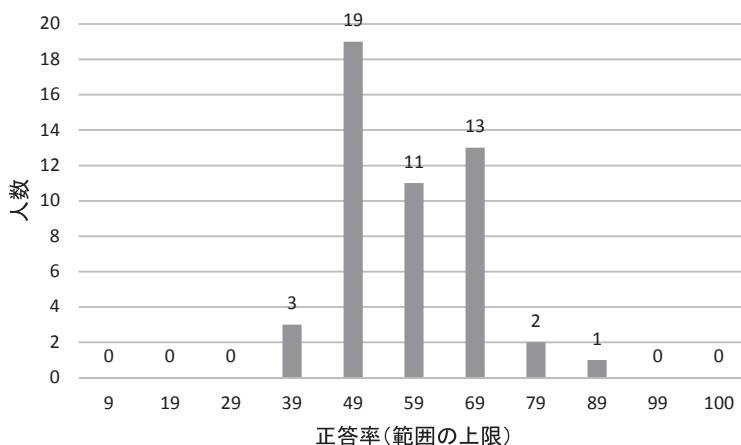


図1 聴解模擬試験の正答率と人数分布

以上の結果から、EPS-TOPIK の聴解試験では、入門段階の学習を終えた程度であれば、事前情報や受験対策が皆無であっても50%前後の正答率には達することが分かる。また、実際にEPS-TOPIKを受験する外国人労働者の場合は、事前に受験対策も行うことから、聴解試験に関しては50%以上の正答率に達することは決して難しくないとと思われる。

#### 4-2-2. 読解模擬試験

読解模擬試験の結果であるが、平均点は100点満点で33.8点であった。したがって正答率では、

33.8%ということになる。EPS-TOPIK は聴解と読解を合わせた正答率が40%以上であることが合格の基準になるが、読解ではこの基準を下回る結果になった。

下の表は問題別の正答率を示したものである。正答率が最も高い問題は問題1で75.5%、反対に最も低い問題は問題2で10.2%であった。

表7 読解模擬試験の問題別正答率

	問題番号 *は業務に関する問題	問題プールの番号	正答率
事物および状況の説明 (36.2%)	1	20	75.5%
	2*	60	10.2%
	3	100	38.8%
	4	140	20.4%
語彙および語法 (27.8%)	5*	180	16.3%
	6	220	22.4%
	7	260	28.6%
	8	300	30.6%
	9	340	34.7%
	10	380	26.5%
	11*	420	24.5%
	12	460	38.8%
実用資料の情報 (41.2%)	13	500	42.9%
	14	540	32.7%
	15	580	67.3%
	16*	620	18.4%
	17	660	44.9%
読解 (31.4%)	18	700	65.3%
	19	740	20.4%
	20*	780	44.9%
	21	820	26.5%
	22	860	26.5%
	23	900	38.8%
	24	940-1	24.5%
	25	940-2	24.5%
読解模擬試験全体		全25問	33.8%

25問のうち、5問（問題番号2, 5, 11, 16, 20,）は外国人労働者が韓国で従事する可能性が高い業務に関する韓国語を使用した問題になっていることが特徴である。このような問題は聴解模擬試験問題には含まれていなかったが、読解模擬試験問題にはおよそ4分の1が含まれていた。これは業務に関する韓国語の問題が問題プールに多数含まれていたためである。

ここでは、最初に同じカテゴリーの問題であるにも関わらず正答率に大きな違いがあった1番と2番、15番と16番の問題を取り上げ、正答率に差が生じた原因を検討するとともに、読解試験の難易度および妥当性について考察することとする。

まず、「事物および状況の説明」カテゴリーの問題である問題1と問題2を見てみたい。問題1の正答率は75.5%であり、このカテゴリーで最も正答率が高いだけでなく、読解模擬試験25問の中でも最高の正答率を記録した。他方で問題2はこのカテゴリーで最も低い正答率であるのみならず、やはり全25問中最低の正答率であった。

読解 1 다음 그림을 보고 맞는 단어나 문장을 고르십시오. (次の絵や写真を見て適切な単語や文を選びなさい。)



- ① 안경 (眼鏡)
- ② 거울 (鏡)
- ③ 열쇠 (鍵)
- ④ 모자 (帽子)

読解 2 다음 그림을 보고 맞는 단어나 문장을 고르십시오. (次の絵や写真を見て適切な単語や文を選びなさい。)



- ① 승강기입니다. (昇降機です。)
- ② 절단기입니다. (切断機です。)
- ③ 용접기입니다. (溶接機です。)
- ④ 급수기입니다. (給水器です。)

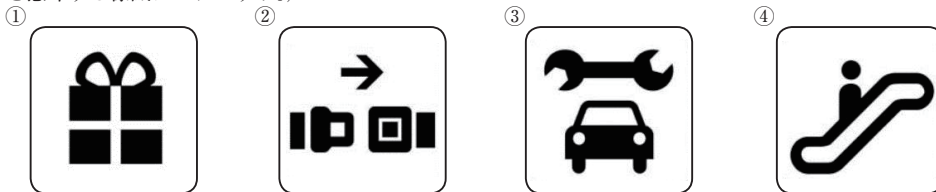
問題 1 は眼鏡の写真を見て、4つの選択肢の中から該当するものを選ぶ問題である。受験者は、眼鏡という単語も含め4つの選択肢の語彙はいずれも既習であったため、正答率が高かったと思われる。

これに対し問題2は業務用エレベーターの写真を見て、適切な選択肢を選ぶ問題である。受験後の反応を観察したところ、受験者の多くはそもそも写真で提示されたタイプの業務用エレベーターを見たことがないようであった。また、4つの選択肢で提示された語彙はいずれも未習であったため<sup>13</sup>低い正答率にとどまったと評価することもできる。さらに言えば、この問題に正答するためには特別な試験対策をすることが前提になると指摘せざるを得ない。業務用エレベーターもそうであるが、その他の選択肢で提示された語彙も一般的な韓国語の学習ではほとんど接することのない単語であるためである。実際、これらの単語がすべて収録されている韓国語教科書は、管見の限り存在しない。

次は15番と16番の問題である。

13 韓国語では、マンションやホテルなどで主として人が利用するエレベーターは英語由来の外来語である 엘리베이터 (エレベーター) を使用するのが一般的であるが、荷物専用のエレベーターについては 승강기가使用されることが比較的多い。試みに Google で両語彙を検索すると、엘리베이터は8,990,000件、승강기는2,710,000件がヒットし、一般的には엘리베이터 (エレベーター) のほうがより親密度が高い語彙であることが窺われる。(2018年1月25日確認)

読解15 다음 중 “안전띠를 매십시오.”를 뜻하는 표지는 어느 것입니까? (次のうち「안전띠를 매십시오<sup>14</sup>」を意味する標識はどれですか?)



読解16 이 사람이 착용하고 있는 보호구는 무엇입니까? (この人が着用している保護具は何ですか?)



- ① 보안화<sup>15</sup>와 안전모 (安全靴とヘルメット)
- ② 마스크와 안전모 (マスクとヘルメット)
- ③ 보안경과 귀마개 (保護眼鏡とイヤーマフ)
- ④ 보안면과 안전장갑 (保護面と安全手袋)

問題15・16はいずれも「実用資料の情報」のカテゴリーで出題された問題である。問題15の正答率は67.3%で全25問のうち2番目に高かったのに対し、問題16は18.4%で正答率が3番目に低かった。問題15では「안전띠<sup>16</sup> (安全ベルト)」の意味が把握できれば、正解を選択肢から選ぶことはさほど難しくない。安全という単語を手がかりに、自動車や航空機のシートベルトで目にすることが多い②を選び取ることができた学生が多かったと思われる。

問題16は溶接作業の写真を見て、身につけている保護具が何であるかを選択する問題である。受験者は大学生であり、このような本格的な溶接作業は未経験であると言える。したがって、溶接作業で使用される保護具についての知識も皆無に近かったものと推測される。選択肢から「保安」「マスク」「安全」といった意味は把握できたようであるが、そのことがむしろ誤答を選ぶ要因になったと思われる。正解は④であるが、保護面という語彙を知らなかった一方で、マスクや眼鏡という単語を知っていたことから、②または③を選択した受験者が多かった。日本語において保護面と同じ機能を持った防具を「溶接マスク」や「溶接メガネ」という場合があることも誤答の理由として考えられよう。

14 受験時には、口頭で問題文を翻訳したが、回答上大きなヒントになりうる「안전띠를 매십시오. (安全ベルトを締めてください。)」は訳さず、韓国語のまま発声した。

15 溶接作業で使用される保護具の翻訳は日本語で一般的と思われる単語に置き換えたが、韓国語の単語を直訳すると以下ようになる。

① 보안화 와 안전모 (保安靴と安全帽) ② 마스크와 안전모 (マスクと安全帽) ③ 보안경과 귀마개 (保安鏡と耳栓) ④ 보안면과 안전장갑 (保安面と安全手袋)

16 「安全带」のうち「安全」は漢字由来のことばであり、また発音も日本語と近いため、受験者は「띠 (帯・ベルト)」の意味まではわからなくても、推測が可能であったと思われる。

正答率が低かった問題 2 と問題 16 は、いずれも一般的な韓国語学習では対応しにくい、業務場面で使用される韓国語を知らなければ正答しにくい問題であると言える。そして EPS-TOPIK の読解においては、このような問題が複数含まれるという特徴がある。次の表は模擬試験の読解問題 25 問のうち、一般的な韓国語の問題と、業務に関する韓国語の問題の平均正答率を示したものである。

表 8 読解における一般的な韓国語の問題と業務に関する韓国語問題の正答率

一般的な韓国語問題	業務に関する韓国語問題
36.5%	22.9%

一般的な韓国語問題の正答率は 36.5% であるのに対し、業務に関する韓国語問題では 22.9% にとどまっている。この結果から、今回の模擬受験においてとりわけ、業務に関する問題で誤答が目立ったことが分かる。

受験者が入門段階を終えた程度の大学生であり、事前に何らの対策をしていなかったことを考慮すると、読解問題で出題されている一般的な韓国語の問題の難易度はさほど難しいものではないと言える。他方で、業務に関する問題は、いわゆる標準的な韓国語教科書の知識では中級レベルであっても対応が難しいことは明らかであり<sup>17</sup>、試験対策をしない限り得点することが難しいと言えるであろう。

しかし、さらに言うならば、このような業務に関する問題を EPS-TOPIK で出題することが果たして妥当であるのかについても検討が必要であると思われる。EPS における仕事の内容はさまざまであるため、実際には溶接作業に携わらない外国人のほうが多いためである。業種としては、製造業の他にも、建設業、サービス業、農畜産業、漁業の各分野で募集が行われており、溶接作業を行わない仕事も多い。製造業で働く者の比率が高いといっても、その仕事内容は多様であることを考慮すると、果たして EPS-TOPIK 受験の段階で溶接に使用する道具の名前を知っていることの意味はいかほどのものであろうか。渡韓前の言語学習の時間も動機付けも十分ではない彼らに対しては、韓国での生活や社会参加に直結した単語を優先して学習できるように誘導することも試験の役割ではないだろうか。

筆者らのこれまでの韓国での面接調査から、EPS で渡韓した大部分の移住労働者の韓国語レベルは初級レベルに留まっていることが分っている<sup>18</sup>。渡韓前の、日常の簡単なやり取りすらおぼつかないであろう時点で、また職種や職場も未定の時点で、これらの語彙知識を問うこと

17 国立国語院 (2014a, b, c) は韓国語教育用語彙リストを示したものである。その上級編 (3 단계) において승강기 (昇降機) が挙げられているが, 보안면 (保護面) は示されていない。なお, 日本において実施されている「ハングル」検定試験の語彙リストにおいては, 승강기 (昇降機) や 보안면 (保護面) は初級～上級レベルのいずれにおいても収録されていない (特定非営利活動法人ハングル能力検定協会 2006a, 2006b)。

18 마쯔자키·후키하라·스케가와 (2017) でこの点を指摘した。

には再検討の余地があると考える。

本読解模擬試験は、50人以上のクラスで39時間の授業を受けた大学生を対象に実施したが、33.8%の正答率を記録した。下の表は正答率別に人数を示したものである。目安となる40%を超えた者は15人、達しなかった者は34人であった。

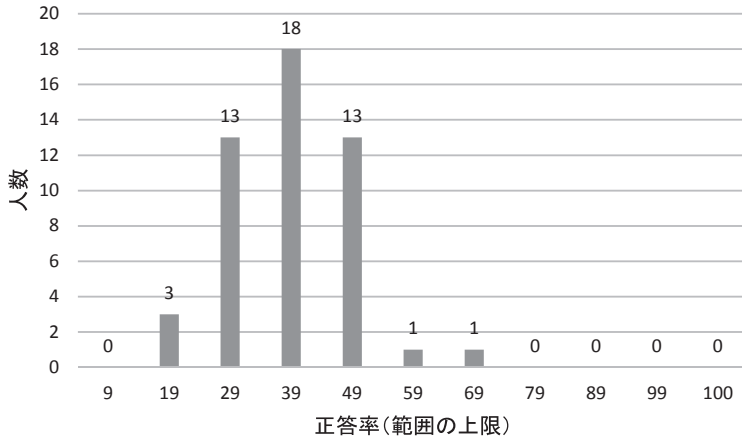


図2 読解模擬試験の正答率と人数分布

以上、EPS-TOPIK を日本の大学で韓国語を学ぶ初級学習者を対象に実施した模擬受験の結果を、聴解と読解に分けて紹介したが、全体の正答率と人数分布を見ると次のようである。

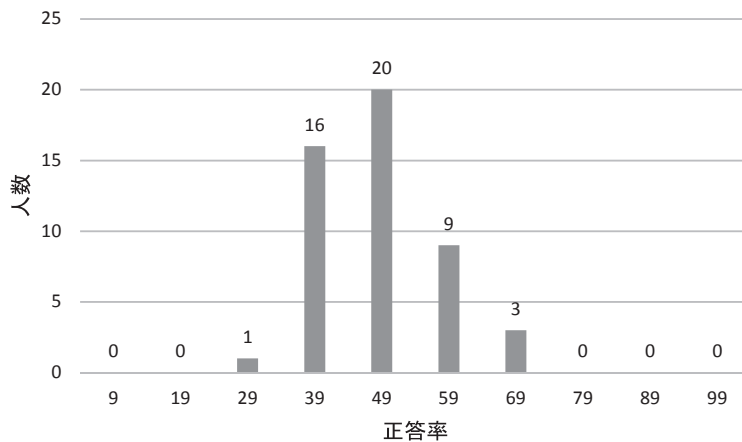


図3 EPS-TOPIK 模擬試験の結果

49人の分析対象者のうち、32人が合格基準となる正答率40%を超えたことが分かる。率にすれば65.3%となり、3分の2弱が基準に達したと言える。ゼロスタートの学習者が40時間ほど



の学習時間で合格基準に達したことは、EPS-TOPIK の難易度を考える際に大いに参考になる。

## 5. 結 論

韓国政府による外国人移住労働制度である EPS において、韓国語試験である EPS-TOPIK は、移住労働の最大の関門である。それは、この試験において基準得点に達しない限り、韓国入国が許可されないためである。また、これまでの先行研究から、合格者数については人為的な操作があることが指摘されながらも、決して高いとは言えない合格率に関するデータも示されていた。ただし、これまでその実態に関しては、公式の情報が極めて限定されていたため、不明な点が多いものであった。そのような経緯からみて、本稿で述べた模擬受験の結果を通してはじめて EPS-TOPIK の特徴や難易度、妥当性について明らかになった点も少なくないと言える。それらの点を以下に挙げる。

第1点目として、合格基準となる40%という正答率は、四者択一式の回答方式であることを考慮すると、さほど高い基準ではないことである。確率的には25%の正答率が予測されるためである。実際にゼロスタートから40時間ほどの学習時間が経過した段階で、事前の対策なしに受験し、3分の2ほどが合格基準に達している。

第2点目として、読解試験に比べ聴解試験は難易度が低いということである。その理由として「音と表記」カテゴリーの問題がとりわけ難易度が低いことを指摘した。また、本稿では詳細に分析できなかったが、聞き取る音声が通常の韓国語の発話速度に比べ極めて遅いことも指摘できるであろう。

第3点目として、聴解試験、読解試験ともに、一般的な韓国語の問題に関して言えば、入門段階を終えた水準の学生であっても40%前後の正答率を得ることができるレベルの難易度であったことである。求められている韓国語のレベルは「初級の下」を超えていればよいというものであろう。

第4点目として、読解試験における業務に関する韓国語の問題は、中級程度の韓国語能力では対応できない難易度であることである。事前の受験対策を行わない限り正答することは容易ではない。このことから得点源としての「音と表記」の問題の難易度や、一般の韓国語問題の難易度とバランスが取れていないことが指摘できる。簡単な会話もおぼつかない受験者に対し、韓国入国前に「승강기 (昇降機)」や「보안면 (保護面)」といった語彙知識を求めることが妥当であるのかについては再検討の余地が指摘できよう。

## 6. おわりに

最後にこれまでの調査研究の成果をふまえて、本研究の言語教育学に対する意義と今後の研究のあり方について考えていることを述べたい。日本においては、実質的な外国人労働者受け入れ開始となった1990年の入管法改正（在留資格の再編）は日本国内における日本語教育の大

きな転換点であった。それまで多数派の日本語学習者であった留学生に対しては短期間で効果的に知識（文型、語彙、表現、文字）を定着させ、読解、作文、聞き取り、および会話能力を涵養することを目的としていた。しかし、就労目的の日本滞在者にとって必ずしも日本語使用は必須ではなく、いずれ帰国することから学習動機もほとんどない事例が散見される。

しかしながら、受け入れ国の言語を知らずに生活することは生活の多くの場面において人間としての尊厳を損ない、著しい不安と不満を抱いたままの長期間の外国滞在を強いられることを意味している。このようなことは、韓国の雇用許可制による労働者においても同様である。第二言語としての韓国語教育は第二言語としての日本語教育同様こうした立場に置かれた弱き人々の尊厳を回復し、より精神的に豊かに日々の生活ができるよう支援することをその義務としている。こうした人々への第二言語教育は学習内容の選択において、それらが目標社会への参加、ネットワーク形成につながるものである必要がある。そして、言語学習に際しても人間らしい生活の営みに直結する内容を選択し、カリキュラムを編成しなければならない。

「テストをするためのテスト」を作成する中で起こりがちなことであるが、たとえば「あひる」や「溶接」のように必要性が低い語彙を使用することは、上述のような第二言語教育観からは乖離している。外国人労働者のホスト社会言語の習得は現代社会の抱える喫緊の課題であり、筆者らは学習者の福祉という観点から今後も調査研究を継続していきたいと考えている。

## 付 記

本研究のデータ収集に際し、文部科学省科学研究費補助金「インドネシア人のL2習得の対照的研究：日本の外国人技能実習制度と韓国の雇用許可制」（平成28年度～平成32年度科学研究費補助金（基盤研究（B）、課題番号16H03436）、研究代表者助川泰彦）からの助成を得た。

## 主な参考文献

### 日本語文献：

- 特定非営利活動法人ハングル能力検定協会（2006a）『「ハングル」検定公式ガイド 合格トウミ初・中級編』
- 特定非営利活動法人ハングル能力検定協会（2006b）『「ハングル」検定公式ガイド 合格トウミ上級編』
- 吹原豊（2010）「移住労働者の言語習得——韓国におけるインドネシア人社会での事例——」『地域文化研究』 8: 27-45
- 吹原豊・助川泰彦（2015）「移住労働者の言語習得を促進する要因についての一考察」『国際社会研究』 4: 21-36
- 吹原豊・松崎真日・助川泰彦（2016）「韓国の雇用許可制語学試験（EPS-TOPIK）からみた就業前の言語習得について」『国際社会研究』 5: 121-140

**韓国語文献：**

국립국어원 『표준국어대사전』

국립국어원 (2014a) 『한국어 교육 어휘 내용 개발 (1 단계)』

국립국어원 (2014b) 『한국어 교육 어휘 내용 개발 (2 단계)』

국립국어원 (2014c) 『한국어 교육 어휘 내용 개발 (3 단계)』

김명광 (2009) 「아시아 국가 한국어교육과정 현황 — 고용허가제 국가를 중심으로 —」 『시학과 언어학』 제17호, 시학과 언어학회, 35-65

김명광 (2011) 「국내 외국인 근로자 정책과 대안: 특수 목적 한국어 교육을 중심으로」 『현대사회와 다문화』 1-2, 대구대학교 다문화사회 정책연구소, 200-225

김유정 (2008) 「고용허가제 한국어능력시험 (EPS-KLT) 의 현황과 과제」 『이중언어학』 38, 이중언어학회, 95-122

마쓰자키 마히루 (松崎真日) · 후키하라 유타가 (吹原豊) · 스케가와 야스히코 (助川泰彦) (2017) 「고용허가제 노동자의 한국어 습득 — 인도네시아인 초급 화자 및 중급 화자의 비교를 통한 일고찰 —」 『國文學論集』 第23輯、檀国大学校国語国文学科

이미혜 (2016) 「고용허가제 한국어능력시험 (EPS-TOPIK) 에 대한 비판적 고찰」 『문화와융합』 38(5), 한국문화융합학회, 461-486

정호진 (2013a) 「EPS-TOPIK 시행 현황 및 관계자 요구 분석」 『비교문화연구』 31, 경희대학교 비교문화연구소, 395-414

정호진 (2013b) 「설문조사를 통해 본 EPS-TOPIK 발전 방안」 『교육문화연구』 19-2 인하대학교 교육연구소, 99-129

한국산업인력공단 (2014) 「EPS workshop for close cooperation with 15 sending countries」

